

# 陸信忠系十王図における五道転輪王幅の再解釈

九州大学人文科学府大学院 博士後期課程 沈宏琳

本発表は、南宋時代（1127～1279年）の寧波地域で活躍した仏画師陸信忠の周辺で制作されたとされる十王図（以下、陸信忠系十王図と称す）の内、俗形人物群像が描かれる五道転輪王幅の図像解釈を通して、地域社会と十王信仰とが結びついた制作背景を明らかにすることを試みるものである。

先行研究では、梶谷亮治氏と宮次男氏によって、いくつかの図像系統の存在が指摘され、井手誠之輔氏の寧波仏画に関する研究によって、地域社会との関係が注目されるに至った。井手氏の見解で特に重要視されたのが、五道転輪王幅に必ず描かれる士大夫姿の男性とその夫人らしき女性である。このような士大夫形象は、東坡巾などの宋代士大夫の服制に従う図像的な特徴をもつことから、そこに十王図の主な注文主、さらに地域の念仏結社の有力な信者の姿が投影されていると指摘されている。五道転輪王幅は、十王図における最後の冥王審判にあたり、彼らが写経奉獻などの作善を行う描写は、自分たちが地獄に陥ることが免れ、さらに先祖が地獄から救済されるという懇望を表しているとする解釈が定説となっている。

しかし、士大夫形象は、経冊や軸を奉獻し、最後の冥王審判に対して直接的に関与している。一般の人物にはふさわしくない彼らの人格を超えた行為には、何らかの特別な役割と機能とがあってしかるべきではないだろうか。彼らの役割と機能を物語展開の一環となしうる五道転輪王幅の図像解釈を再検討する必要があるだろう。

本発表では、陸信忠系十王図を中心に、その五道転輪王幅を再読する。陸信忠系十王図は、その規模と審判と地獄の図様をもとに三つの系統に大別されるが、いずれの系統の図像も、五道転輪王幅において士大夫形象が供物を献上する場面が一環して共通している。その周囲のモチーフなどを改めて分析した結果、士大夫の形象は俗人と冥王とを媒介する存在であることがわかる。類似する役割と機能を有する存在としては、十王図が制作された当時の寧波で土地神として信仰を集めていた張大帝が、とりわけ注目される。

土地神は、人の死後、その報告を受け、亡者の魄を土地廟に拘束し、数日間にわたって留めた後、冥界に送付するという。その間、親族たちは、亡者の冥福を祈って、土地神に供物を供えたりする。一方、冥界における審判では、土地神は、罪状を判断する「陪審員」として参加していたことが冥王審判に関する文学史料から窺える。すなわち、土地神は、現世の俗人と冥王とを結びつける代理人として働いている。この役割は、五道転輪王幅の図像解釈の上で無視できないのではないだろうか。

士大夫形象のような同時代における現実の視覚像注目することは、当時の民間信仰に埋もれてしまった十王図の制作背景を生き生きと明らかにするだけでなく、地域の人々の宗教への参与を解明する手掛かりになるだろう。